TIMΣ XXIIIに参加して

関田　康慶

1977年7月25日より27日までの3日間にわたり，真夏の太陽のふりそそぐギリシャの首都アテネにおいて，XXIII International Meeting of the Institute of Management Sciences が開催された．Management Science Serving Society through Management というテーマのもとに，105のセッションが構成され，発表論文数525，ペーパー・フェアの論文発表件数126という盛況を見，登録参加者数は982名にのぼる会議であった．

文化・科学大臣の歓迎挨拶の後，各セッションは，Athens Hilton Hotel と，映画「ベンジーの愛」に登場する Caravel Hotel という2つの近隣したホテルを舞台に，午前10時から開始された．

セッションは (Ⅰ)Contributions of Management Science and OR to Functional Areas of Management (Ⅱ)Contributions of Management Science and OR to Major Industries and to Major Areas of Public Concern (Ⅲ)Management Science and OR Methodologies，と大きく3つのテーマで構成され，発表論文数はテーマ(Ⅰ)が173件，テーマ(Ⅱ)が166件，テーマ(Ⅲ)が186件であった．

まず第1のテーマにおける顕著なセッションは，マネジメント情報システムを論じたものであろう．多様なマネジメント，分権化，多国間の情報システム・ネットワーク形成などの問題が取りあげられ，コンピュータ化の進展に対する経営科学や OR の応用が，具体的問題に則して論ぜられていた．また組織構造や組織設計問題に関するセッションも多く，経営政策，マンパワー，効率性などが，組織の問題に関連して論じられていた．

第2のテーマに関するセッションは，公共政策，都市の経営，技術変化の測定やマネジメント，エネルギー資源に関する規制や計画，国家的レベルのコンピュータ・ネットワーク，保健サービス，発展途上国の技術発展などの問題が論じられていた．これらの問題は，非常に大規模で複雑な問題を含んでいるために，数理的なモデル化まで到らないものも多かったが，このことは逆に多くの解決すべき問題をわれわれに提示している．

第3のテーマのセッションは，方法論を中心に展開されてはいるが，具体的な問題との関連で方法論を論じている点に特色がみられた．

初日夜のギリシャ大統領の会議場での演説・レセプションなどは，ギリシャ側の歓待ぶりを示すものであるが会議中の婦人用プログラムはなかったように思う．会議内容の詳細は会議の性質上網羅できていないので，ここでは私の全般的な感想を述べておきたい．もっとも強く印象づけられたのは，経営科学やＯＲが各分野への具体的応用との関連で多く論じられていた点である．方法論のセッションにおいてさえこの傾向がみられたのは驚きであった．今回のテーマ自体がこのような傾向を生み出す素地になってはいるが，それにしてもわが国ＯＲ学会の論文発表セッションの構成とは相当趣を異にするものであった．顧みるに，本来のＯＲの姿は現実の問題とのかかわりにこそ意義ある発展を期待できた．わがＯＲ学会もオペレーションズ・リサーチ誌で実に興味深い問題を取りあげているのだが，学会の発表となると，どうも現実問題との関連が弱いように思われる．いっそのこと手法別のセッションを縮少して，アテネの会議のように問題別のセッションをつくることを提案したいのですがいかがなものでしょうか．

DP国際学会に参加して

沢木　勝茂

International Conference on Dynamic Programming がブリティシュ・コロンビア大学(バンクウバー)で開催されたのは，1977年の4月であった．筆者の知る範囲では，ＤＰだけに関する最初の国際学会であったと思う．開催されるまでの準備期間が短かかった理由もあって，十分な情宣が行なわれず日本ではあまり知られてないと思われるが，日本からの参加者は九州大の岩本誠一氏と筆者の2名で，会議自体参加者数60～70名程の小規模の国際会議であった．しかしながらＤＰの主要な貢献者の多くが参加しており，参加者一同が議論し交歓しあうのに大変親しみやすく，ビッグ・ネームの人々と個人的に自由討論のできる会議であった．

この会議で発表された論文とその内容は，アカデミック・プレスより Proceeding として，後日発刊される予定であり，また紙面的余裕もないので，以下では，K. Hinderer, E. Denardo, A. Veinott の3人によるパネル・ディスカッションにおいて，今後のＤＰの研究方向とか将来性についてどんな事柄が議論されたかを，筆

© 日本オペレーションズ・リサーチ学会．無断複写・複製・転載を禁ず．